

ダニエル書 - 第四十七番

欺瞞的教義の仮面を剥がす：ダニエル書8章の批判的分析とアドベンチスト神学への挑戦

Jeff Pippenger

2024-01-11

ダニエル書8章9節から12節においてローマの小さな角が描かれるとき、それは異性装の象徴であるがゆえに、墮落した象徴である。すなわち、男と女の間を行き来する異性装者の象徴である。このことは、ローマが二つの段階で表されるというミラー派の理解と一致している。第一段階はローマの国家権力、第二段階はローマの教会権力である。しかし、これらの節で性が揺れ動く点では、その小さな角は歴史的・預言的な順序から外れている（墮落）。それでも四つの各節はそれぞれ、ローマの国家権力か教会権力のいずれかに直接結びつく歴史を表している。異教ローマは、その帝国権威に抵抗する者すべてを迫害したが、10節における教皇ローマ（女性的）による迫害は、特に天に向けられている。

第四で最後の王国はローマであるとするミラー派の理解においては、国家から教会へ、また国家へ、さらに教会へと揺れ動くことは懸念事項ではなかった。彼らはダニエル書2章の足にある鉄と粘土の混合を見て、それをローマの二つの局面と単純に理解し、第四と第五の王国の具体的な歴史的順序を定義することには関心を払わなかった。第7章についても同様に理解しており、いと高き方に逆らって大いなることを語る角の前に、ローマの獣の元の十本の角のうち三本が根こそぎにされたと見ていた。たとえミラーが9節から12節における性の揺れを認識していたとしても、第四の王国がローマであるという彼の理解にとっては重要ではなかった。ミラー派の理解では、第四の王国は1798年に終わり、その次の預言的出来事はキリストの再臨であった。

女性的な角は、男性的な角と靈的な姦淫を犯す女を指し、10節と12節に表されている。

そしてそれは強大になり、ついには天の軍勢にまで及び、天の軍勢の一部と星々の一部を地に投げ落として踏みこみつけた。ダニエル 8:10。

教皇権による迫害はキリスト教（天の軍勢）に向けられ、12節では、教皇ローマ（女性）が、ヨーロッパの諸王たちと姦淫するという背きによって、その殺人的な業を成し遂げる力を受ける。

背きのゆえに、日ごとのいけにえに対して彼に軍勢が与えられ、彼は真理を地に投げ打ち、思うままにふるまって栄えた。ダニエル書 8:12

その節にある「host」は、「the daily」に対して、教皇権に与えられた軍事力を表している。「against」は「from」を意味する。「the daily」によって表されるヨーロッパの異教の王たち（異教ローマ）から、「by reason of transgression」により、教皇権に軍事的支援（軍勢）が与えられた。教会が関係を支配する形での政教一致の結合こそが、その「transgression」である。その「transgression」のぶどう酒はキリスト者の血である。ひとたび教皇権が異教ローマの軍隊を掌握する

と、教皇ローマ（「it」）は「真理を地に投げ捨て、事をなし、栄えた」。

ダニエル書11章31節には、軍勢が教皇ローマに与えられることも表されている：

彼の側に軍勢が立ち、彼らは力の聖所を汚し、日ごとのいけにえを取り去り、荒廃をもたらず忌むべきものを据える。ダニエル書 11:31.

この節は、異教ローマから教皇ローマへの歴史的移行を示している。この節における「腕」とは、496年にフランク王クロヴィス（フランス）に始まって、教皇権を擁護して立ち上がったヨーロッパの諸王のことである。「腕」はまた、4世紀以降から538年に至るまでの絶え間ない戦争を通して、「力の聖所」（ローマの都）を汚した。さらに「腕」は、教皇権の台頭に対する異教の抵抗を取り除き、508年までにその異教の抵抗は終結した。

「取り去る」と訳されている語はヘブライ語の「sur」で、「取り除く」を意味する。「腕 (arms)」は、「荒廃をもたらず憎むべきもの」（教皇制）を西暦538年に地上の王座に据えた。ダニエル書8章12節が、女性形の小さな角に「軍勢」が与えられたと示しているのは、11章31節の証言と一致している。ヨハネの黙示録も13章で同じ真理を証言している。

私が見た獣は豹のようで、その足は熊の足のよう、その口は獅子の口のようであった。竜は自分の力と位と大いなる権威をその獣に与えた。黙示録 13:2.

ホワイト姉妹は、2節の獣は教皇権であり、その節の竜は異教ローマであると、直接述べている。異教ローマは教皇権に三つのものを与えた。「その力、その座、そして大いなる権威」。

軍事力は、496年にクロヴィスを皮切りに、異教のローマによって与えられた。統治するための「座」は、330年に、皇帝コンスタンティヌスが首都をコンスタンティノープルに移し、以前の首都ローマを教皇の教会の支配に委ねたとき、教皇権に与えられた。533年には、皇帝ユスティニアヌスが、教皇は教会の長であり異端者の是正者であると布告し、自らの「大いなる権威」をローマの教皇に委譲した。ダニエル書8章12節は、「軍勢」が与えられた時を示しており、その預言的真理は多くの証人によって証しされている。その時点（496年に始まって）から、教皇権は「栄えた」。

それは、1798年にイスラエルの北王国に対する憤りが終わり、教皇制が致命的な傷を負うまで、「行い、栄える」ことを続けるだろう。

その王は自分の思うがままに行い、自らを高くし、すべての神々にまさって自分を大いなるものとし、神々の神に逆らって驚くべきことばを語り、憤りが成就する時まで栄える。定められたことは必ず行われるからである。ダニエル書 11:36

第8章9節は、男性形のローマ（異教ローマ）を描写しており、異教ローマが成し遂げた三段階の征服過程を表すとともに、教皇ローマが地上の王座に就くために征服されることになる三つの地理的領域を象徴していた。これは、第7章で引き抜かれた三本の角によって示されているとおりである。異教ローマと教皇ローマにおけるこの二つの三段階の征服は、ダニエル書11章40節から43節に描かれているように、現代のローマの三つの地理的障害を表していた。さらに第8章11節では、男性形の小さな角（異教ローマ）が再び示

される。その節において、聖なる論理はあまりに堅固であったため、エルサレムを支配する嘲る者たちは、自らの偽りの基盤を築くために、いくつもの神学的な嘘を導入せざるを得なかった。

さらに、彼は軍勢の君にまで自らを高ぶらせ、彼によって日ごとの献げ物は取り去られ、その聖所の場所は投げ倒された。ダニエル書 8:11

1863年以降アドベンチズムに持ち込まれてきた偽物の硬貨や宝石の問題に取り組み始めるにあたり、次の点に留意すべきである。アドベンチズムが、背教的プロテスタント主義とカトリックの教義を擁護・維持するための拠り所として誇っている、いわゆる神学的専門性の主要な分野が二つあるということである。現代のアドベンチズムの神学者たちの主張は、自分たちは聖書史の専門家か、聖書言語の専門家である、というものだ。彼らのその聖句の適用は、預言の言葉が彼らにとって封印された書となってしまうことを明らかにし、また、聖書言語の専門家であるという彼らの主張が単なる現代のパリサイ主義の現れにすぎないことも示している。

第一に、九節から十二節における小さな角についての文法上の性の交替を無視している点である。もし彼らが本当にヘブライ語の専門家なら、ダニエルがこれらの節で意図的に文法性の交替を用いているという事実を、否定したり矮小化したりはしないだろう。小さな角は両方の文法性で表され、その性がこれらの節の中で行ったり来たりする。神学者たちは、この事実をごみや偽金で覆い隠そうとするが、それは明確に、十一節が指しているのは教皇ローマではなく異教ローマであることを示している。彼らはもちろん、十一節の小さな角はローマ教皇だと主張するが、実際には異教ローマのことなのである。

「小さい角」についての四つの節のうち二つが男性形で、二つが女性形であるといったん認めれば、聖書の預言において女は教会を、男は国家を表すという聖書的真理を当てはめるのは容易である。このことを知れば、見ようと願うすべての人は、第11節の「小さい角」が女性形のローマ（教皇ローマ）ではなく、男性形のローマ（異教ローマ）であることを理解できる。

それゆえこの節は、異教ローマ（彼）が軍勢の君にまで自らを高ぶらせた、と教えていると解されるが、これは異教ローマが軍勢の君をカルバリの十字架にかけたときにしたのと同様である。異教ローマは十字架においてキリストに敵対して自らを高ぶらせただけでなく、この節は、彼（異教ローマ）によって「日ごとのいけにえが取り去られた」とも述べている。

ダニエル書には、どちらも「取り去る」と訳されているヘブライ語が二つあります。その語は「sur」と「rum」です。どちらの語も聖所の務めで用いられています。sur は取り去る、除くという意味で、聖所の祭壇から灰を取り除くとき、この灰の除去を表す語として「sur」が用いられます。rum は持ち上げる、あがめる（高める）という意味で、聖所の祭司が揺り動かす供え物を掲げるとき、その供え物を「rum」（掲げる）するのです。十一節では、異教ローマ（「the daily」）は、異教の宗教を高く掲げてあがめることによって、異教を「rum」（取り去る）ことになるでしょう。

異教ローマは、異教の宗教を高く掲げ、崇めるだろう。聖書の言語に精通していると自負するアドベンチストの神学者たちは、ダニエル書における「take away」のすべての箇所を「remove」と見なすことを選んでいる。彼らはダニエルの独特で正確な記述を認めず、その結果、自分たちを預言者ダニエルの上に置いている。

聖書の原語に通じていると称する神学者たちは、ダニエルが二つの異なる語を用いたにもかかわらず、同じ意味を意図していたのだと正当化するための論拠を並べ立てる。彼らは自らの誤った主張を支えるために、冗長で退屈な語義研究を延々と提示する。聖書史を理解していると称する神学者たちは、その誤った適用は、歴史の異なる時期には同じ語でも意味が異なりうるという認識に基づいているのだと主張し、したがってダニエルが二つの異なる語を用いた場合、ダニエルが実際に何を意味したのかを見極められるのは歴史の専門家だけだとする。「line upon line」という方法論から逃れようとする神学者たちがしばしばそれらを用いるため、これら二つの誤った方法を見抜くことは重要である。

さらに、彼は軍勢の君にまで自らを高ぶらせ、彼によって日ごとの献げ物は取り去られ、その聖所の場所は投げ倒された。ダニエル書 8:11

その聖句で「取り去られた」と訳されている語は、本来「持ち上げて高める」という意味であり、取り除くという意味ではない。この事実はアドベンチストの神学者たちに混乱と矛盾を生む。というのも、ダニエルが用いた語の本来の定義をその聖句に当てはめて簡単に検討してみるだけで、彼らの前提は成り立たなくなるからである。彼らは、その聖句の「小さな角」は教皇ローマだと主張し、したがって、その聖句は「彼によって」（教皇ローマ）「日々のものが取り去られた」と読むことになる、と。

彼らはもちろん、シスター・ホワイトがそれは人間の知恵によって付け加えられ、本文には当てはまらないとはっきり述べている追加の語を、何の問題もなく含めている。

それから私は、「常なるもの」（ダニエル書8:12）に関して、「いけにえ」という語は人間の知恵によって付け加えられたものであり、本文に属するものではないこと、また主がそれについての正しい見解を「審判の時の叫び」を告げた者たちにお与えになったことを見た。『初期の著作』、74頁。

彼らは「the daily」をキリストの聖所における奉仕と見なしているので、「daily sacrifice」は「the daily」が天の聖所におけるキリストの犠牲の働きであるという概念を支持する。しかし、靈感は「sacrifice」という語は「本文に属していない」と指摘している。

エフライムの酔漢たちが“the daily”をキリストの聖所での奉仕と同一視すると、その節は次のように読めることになる。「彼によって（教皇ローマ）“the daily”は取り去られた」、あるいは「教皇権力によって、キリストの聖所での奉仕は取り去られた」。彼らは実際にこの虚偽を教えている。彼らは、教皇支配の間を通して、キリストの聖所での奉仕に関する真の理解が人々の心から取り除かれたのだと主張する。

しかし、「take away」と訳されているその語は、取り去ることを意味せず、高く掲げ、あがめることを意味する。もし聖書言語の専門家を自称する人々が、ヘブライ語の語「ru

m」の意味をその箇所正しく適用するならば、彼らの訳は「教皇権によって、キリストの聖所における奉仕は高く掲げられ、あがめられた」と言わなければならないだろう。教皇権がいつキリストを高く掲げ、あがめたというのか。

彼らは、ヘブライ語の語「sur」の定義をヘブライ語の語「rum」に押し付けようとしている。ダニエルは、ほかの二つの節で「the daily」と関連して「取り去る」を意味する語「sur」を用いているが、十一節では、引き上げて高めることを意味する語「rum」を選んだ。この節についての作り話の数々が愚かであるのは、「take away」と訳される語の意味をねじ曲げているからである。しかも、キリストの聖所での奉仕が人々からいかなる形でも取り去られたことは、これまで一度もない。

しかし、この方は、永遠に生きておられるので、変わることもない祭司職を持っておられる。それゆえ、この方によって神に近づく者たちを、完全に救うことができになる。なぜなら、この方は彼らのために取りなすため、いつも生きておられるからである。ヘブライ人への手紙 7章24、25節。

アドベンチストの神学者たちがその聖句の誤った適用を正当化するためにそう主張しているように、かつて教皇権が聖所におけるキリストの執り成しを取り除くための何らかの権力を行使した時期があったなどと言うのは、全く馬鹿げている！

しかし、神学者たちは、その聖句が、教皇制がキリストの聖所における奉仕を高く掲げ、あがめたことを示しているとは教えない。彼らは、ダニエル書の言葉の意味とエレン・ホワイトの靈感による勧告を避け、ダニエル書の言葉が証ししているにもかかわらず、自分たちが教えたことを教える。

さらに、彼は軍勢の君にまで自らを高ぶらせ、彼によって日ごとの献げ物は取り去られ、その聖所の場所は投げ倒された。ダニエル書 8:11

神学者たちは、その節は「教皇権によってキリストの聖所での奉仕は取り去られた」という意味だと教え、さらに、人々の心からキリストの聖所での奉仕が取り去られたことは、その取り去りと関連してキリストの聖所の「場所が打ち倒された」という事実によって裏づけられているとする。聖書の中には、キリストがとりなしを行う天の聖所がいまだかつて打ち倒されたと述べる聖句は一つもない。また、「彼の聖所の場所」である天そのものが、いまだかつて打ち倒されたと述べる聖書箇所もない。再び神学者たちは自らを預言者ダニエルの上に置いている。というのも、ダニエルがその考えとは正反対のことを教えているにもかかわらず、彼らはその節の「彼の聖所の場所」は神の聖所を指すのだと主張するからである。

ヘブライ語の自称専門家たちは、その節ではヘブライ語の語「rum」をヘブライ語の語「sur」の意味で理解すべきだと主張している。彼らはまた、ヘブライ語の語「miqdash」はヘブライ語の語「qodash」として理解されるべきだとも主張している。『ダニエル書』では「miqdash」と「qodash」はどちらも単に「聖所」と訳されているが、意味は異なる。「miqdash」は、神の聖所であれ異教の聖所であれ、あらゆる聖所を表す。これは聖所を指す一般的な語だが、「qodash」は聖書では神の聖所を表す場合にのみ用いられる。

ダニエルは、異教の聖所と神の聖所の違いを知っていた。もしダニエルが異教の聖所を指し示そうとするなら、彼は「miqdash」という語を用いよう。連続する四つの節の中で、ダニエルが両方の語を三度用いているという事実、ヘブライ語のいわゆる専門家たちが決して言及しないのは、私には驚きだ。「sanctuary」と訳される二つのヘブライ語をダニエルがどのように用いているかが、ダニエルの意図した意味を明確にしている。

まことに、彼は天の軍勢の君にまで自らを高ぶらせ、彼によって日ごとのいけにえは取り去られ、聖所の場所は投げ落とされた。背きのゆえに、日ごとのいけにえに逆らう軍勢が彼に与えられ、彼は真理を地に投げ落とし、事を行って栄えた。すると、ひとりの聖なる者が語るのを私は聞き、別の聖なる者が語っていたその聖なる者に言った。「日ごとのいけにえと、荒廃をもたらす背きに関するこの幻、すなわち聖所も軍勢も踏みにじられることになるのは、いつまでですか。」彼は私に言った。「二千三百日に至るまでだ。そのとき、聖所は清められる。」ダニエル書 8:11-14

アドベンチズムの基盤となるまさにその箇所、ダニエルは、いずれも「聖所」と訳される二つの異なるヘブライ語を用いている。13節と14節では、ダニエルは、聖書において神の聖所だけを指すために用いられる「聖所」のヘブライ語を選んでいるが、11節では、神の聖所にも異教の聖所にも用いられ得る一般的なヘブライ語を用いている。

もしダニエルが、十一節の「聖所」を神の聖所だと特定しなかったのなら、彼はその後の三節の中で二度用いているのと同じヘブライ語を用いたはずだ。十一節の異教の聖所と、十三・十四節の神の聖所とを区別していたことは、まったく明白である！ところがエフライムの酔いどれどもは、十一節で「投げ落とされた」「彼の聖所の場所」は神の聖所の場所だと主張しつつ、「場所」という語を避ける。

彼らは、教皇権がキリストの執り成しの務めを奪い取り、天の聖所の真理を投げ落としたと教えている。しかし、ダニエルは、11節の「聖所」は神の聖所ではなく、異教の聖所であることを明確にしている。さらに、投げ落とされたのは「聖所」そのものではなく、その聖所の「場所」であることも同様に明確にしている。

九節から十二節に見られる意図的な文法上の性の揺れを認めることを拒み、現代の神学者たちは、背教的プロテスタンティズムに由来する「the daily」の定義を採用し、人間の憶測や伝統、慣習という砂の上に土台を築き始めた。十一節に至ると、彼らは、ミラーが「the daily」を異教と理解したのは正しかったと指摘するシスター・ホワイトの靈感による勧告さえ退け、カトリックおよびプロテスタントの神学への愛着を擁護するために、論点そらしと憶測の術を用い始める。

彼らは、その節の中で異教ローマを教皇ローマに変え、「高く上げてあがめる」を意味する語に「remove」という定義を無理やり押し付ける。彼らは「the daily」のサタンの象徴を神の象徴として定義し、さらに、聖所の「その場所」への直接の言及を避けつつ、異教の神殿が神の神殿であると言い張る。そして、「無学な者」（イザヤがそう呼ぶとおり）は、「有学な者」がそうだとやってやればはじめて理解し、作り話のごちそうを受け入れて自らの滅びを招く。

次回の記事でも引き続き、ミラーの夢において宝石として表現された知識の増加について考察します。

使徒パウロは、「ある者たちは信仰から離れ、惑わす霊と悪魔の教えに心を寄せるようになる」と私たちに警告している。これは私たちが予期すべきことである。私たちが被る最大の試練は、かつては真理を擁護しながらも、それから背を向けて世に向かい、憎しみと嘲りの中でそれを踏みにじる人々によってもたらされる。神は、ご自身に忠実なしもべたちに果たすべき務めをお与えになっている。敵の攻撃には、御言葉の真理をもって応じなければならない。虚偽はその仮面をはぎ取られ、その真の性質が明らかにされなければならない。また、ヤハウエの律法の光が、世の道徳的暗闇に輝き出なければならない。私たちが御言葉の要求を示さなければならない。この厳粛な務めを怠るなら、私たちが咎なしとされることはない。しかし、真理を擁護して立つときに、自分自身を擁護して立ち、そしりや歪曲を負うように召されているからといって大騒ぎすることのないようにしよう。自分を哀れむことなく、いと高き方の律法のためにこそ熱心であろう。

使徒は言う。「時が来れば、人々は健全な教えに耐えなくなり、自分の欲望のままに、耳に心地よいことを言う教師を大勢自分のためにかき集め、真理から耳を背けて作り話に向かうようになる。」あらゆるところで、神のことばを無にする者たちの惑わす空想に、人々がたやすくとらわれていくのを見る。しかし、真理が彼らの前にもたらされると、彼らはいら立ちと怒りで満たされる。だが、神のしもべへの使徒の勧めはこうである。「すべてのことにおいて目を覚ましていなさい。苦難に耐え、伝道者の働きをなし、あなたの務めを十分に果たしなさい。」彼の時代にも、主の働きから離れていった者がいた。彼はこう書いている。「デマスは今の世を愛して私を見捨てた。」さらに彼はこうも言う。「銅鍛冶のアレクサンデルは私に多くの害を与えた。主がその行いに応じて彼に報いてくださるように。あなたも彼には用心せよ。彼は私たちのことばに激しく敵対したからである。」

預言者や使徒たちも、反対や非難という同様の試練を経験した。そして、汚れなき神の小羊でさえ、私たちと同じように、あらゆる点で誘惑を受けられた。彼は、ご自分に敵対する罪人たちの反抗を耐え忍ばれた。

この時代のあらゆる警告は忠実に伝えられなければならない。しかし、「主のしもべは争ってはならず、むしろすべての人に優しく、教えるに適し、忍耐強く、柔和をもって反対する者を教え諭すべきである。」私たちが、信仰を捨てた者たちの欺きの働きによって汚されることのないよう、私たちの神の御言葉を慎重に大切にしなければならない。彼らの霊と影響に対しては、暗黒の君に襲われたとき私たちの主が用いられたのと同じ武器——「書いてある」——で抵抗すべきである。私たちが神の言葉を巧みに用いることを学ばなければならない。勧めはこうである。「神に認められる者として自らを示すよう努め、恥じるところのない働き人となり、真理の言葉を正しく取り扱いなさい。」偽教師や人を惑わす者の入り組んだ誤りに立ち向かうためには、勤勉な働きと切なる祈り、そして信仰が必要である。というのも、「終わりの日には苦難の時が来る。人々は自分を愛し、金銭を愛し、自慢し、高慢で、神を冒瀆し、親に不従順で、感謝せず、不敬虔で、自然の愛に欠け、和解せず、中傷し、自制せず、残忍で、善をなす者を侮り、裏切り、向こう見ずで、思い上がり、神よりも快樂を愛し

、敬虔の形はあってもその力を否む者となる。こういう者たちから離れよ。」これらの言葉は、神のしもべたちが相対しなければならない人々の性格を描き出している。「中傷する者」「善をなす者を侮る者」が、この退廃した時代には自分の神に忠実な者たちを攻撃するだろう。しかし天の大使は、主が示された霊をあらわさなければならない。へりくだりと愛をもって、人々の救いのために働かなければならない。

パウロは神の御業に反対する者たちについてさらに語り、彼らを、古代イスラエルの時代に忠実な者たちに対して戦いを挑んだ人々になぞらえている。彼はこう言う。「今、ヤンネとヤンブレがモーセに敵対したように、これらの者もまた真理に逆らっている。心の墮落した者、信仰に関しては不適格とされた者たちである。だが彼らは、これ以上進むことはない。彼らの愚かさは、あの者たちの時と同じように、すべての人に明らかにされるからである。」私たちは、神に対して戦うことの愚かさが明らかにされる時が来ることを知っている。どれほど中傷され、軽蔑されようとも、私たちは静かな忍耐と信頼のうちに待つことができる。なぜなら「明らかにされない隠れたことは何ひとつない」からであり、神を敬う者は、人々と御使いたちの前で、神によって誉れを受けるからである。私たちは改革者たちの苦しみにあずかるのである。「あなたをのしる者たちのそしりは私の上に降りかかった」と書かれている。キリストは私たちの悲しみを理解しておられる。私たちのうち誰ひとり、十字架をただ一人で負うように召されてはいない。カルバリの苦難の人は、私たちの痛みに同情しておられ、試みに会って苦しまれたように、彼のために悲しみと試練のうちにある者たちを助けることができになる。「まことに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようとする者はみな、迫害を受ける。しかし、悪い人たちや人を惑わす者たちは、だまし、まただまされながら、ますます悪くなる。だがあなたは、学んだ事柄のうちにとどまりなさい。」レビュー・アンド・ヘラルド、1888年1月10日。